

琉球大学学術リポジトリ

膀胱壁を用いた気管再建の実験的研究

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2016-09-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 知念, 徹治, Chinen, Tetsuji メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/35325 |

(別紙様式第7号)

論文審査結果の要旨

| | | | |
|--|---------------------|------------------|-------|
| 報告番号 | 課程博 * 第 号 論文博 | 氏名 | 知念 徹治 |
| 論文審査委員 | 審査日 | 平成 28 年 5 月 11 日 | |
| | 主査教授 | 野口 洋文 印 | |
| | 副査教授 | 西 卷 正 印 | |
| | 副査教授 | 清 水 雄 介 印 | |
| (論 文 題 目) | | | |
| Experimental reconstruction of the trachea with urinary bladder wall (膀胱壁を用いた気管再建の実験的研究) | | | |
| (論文審査結果の要旨) | | | |
| <p>上記論文に関して、研究に至る背景と目的、研究内容および研究成果の意義と学術的水準について慎重に検討し、以下のような審査結果を得た。</p> <p>1. 研究の背景と目的</p> <p>気管原発腫瘍や甲状腺癌の気管浸潤、気管切開後合併症としての気管狭窄など、様々な傷病に対して気管再建術が必要となる。現在のところ最も安全で確実な気管再建法は端々吻合であるが、この場合の切除範囲の限界は一般的に6cm程度とされており、これを超える広範囲気管切除が必要な症例に対しては、永久気管瘻の造設が避けられない。実験的には広範囲切除後の気管再建に、さまざまな生体材料と人工材料が代用気管として試みられてきたが、いずれも未だ完全な臨床応用には至っていない。本研究の目的は、膀胱壁を用いた気管再建の安全性と有用性を検証し、臨床応用の可能性を検討することであった。</p> <p>2. 研究内容</p> <p>ビーグル犬の頸部気管を管状に切除(6気管軟骨輪)して気管欠損状態とし、自己の膀胱壁で作成された代用気管を移植された。はじめの10頭(第1シリーズ)においては移植部を有茎大網弁で被覆されたのに対し、続く6頭(第2シリーズ)においては、大網弁なしの手術が施行された。</p> <p>結果、いずれのシリーズでも術死は無く、移植部の致命的な感染も起こらなかった。合併症としては第1シリーズの4頭に気管狭窄が認められたが、致命的ではなかった。また、ステントの移動に伴う突然死1例が発生し、その対応として第2シリーズでは気管軟骨固定の処置が追加された。</p> <p>移植片の内腔側は扁平化生上皮で覆われ、移植片の粘膜下組織に骨組織が確認された。骨形成は特に大網被覆の及ばない部位で、あるいは全く大網被覆をしない術式において顕著であった。病理学的所見からも膀胱壁移植片の骨形成には一定の虚血刺激が関与していると推定された。</p> <p>3. 研究成果の意義と学術的水準</p> <p>本研究では、自己の膀胱壁を用いることで、安全で有用な気管再建が可能であることが実験的に示された。また、膀胱壁移植片の骨形成メカニズムについて、病理学的根拠に基づく興味深い仮説が述べられている。膀胱壁を用いた気管再建は、将来の人工気管の臨床応用までの暫定的な術式として、あるいは応急的な気管形成術として活用できる可能性がある。</p> <p>臨床的には困難とされている6cmを超える広範囲気管切除後の気管再建において、比較的簡便で安全な外科的手法が示されたという意義は大きい。</p> <p>以上により、本論文は学位授与基準を満たすものであると判断した。</p> | | | |

- 備 考
- 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。
 - 2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。
 - 3 *印は記入しないこと。